賀川豊彦と一粒の麦

賀川豊彦先生は、生協・農協の生みの親といわれ、何度かノーベル文学賞・平和賞の候補者となったことで知られている。特に小説の、「死線を越えて」・「一粒の麦」は大ベストセラーとなった代表作で、共に映画化もされた。また、外国でも高く評価され、シュバイツアー・ガンジーと共に「二〇世紀の三大聖人」とたたえられた。

先生は、明治二十一年(一八八八)兵庫県神戸市で生まれ、幼くして両親を亡くし、徳島の父の実家に跡取りとして引き取られたが、辛く孤独な日々を過ごしていたといわれる。そんな時に出合ったのがキリスト教で、二人の宣教師の温かい人柄に触れ、奉仕活動の尊さを実感していった。

この時代の日本は、近代化や市場経済の発展に伴い、貧富の差などが大きな社会問題となっていた。神戸にも発展から取り残されたスラム(貧民街)が形成されていた。先生は、そうした人々を救おうと彼らに寄り添い、その暮らしを知るためスラム街へ移り住んだ。

しかし、貧しさから住人たちの生活は無計画なその日暮らし、生活苦から善悪の感覚を麻痺させるほど荒みきっていた。

厳しい現実に苦悩する先生はある時、スラムの中で互いを助け合い支え合う人々の姿を見たとき、人々に必要なのは不安や心の痛みをみんなで一緒に解決し、力を合わせ問題に立ち向かう「協同」の精神であることに気づいた。みんなが協同して貧富の差や農村の困窮などの問題を解決していく活動を実現するため、アメリカへ留学し、労働組合運動など様々な協同の活動に携わることに尽力した。帰国後、消費組合運動(生活協同組合)にも取り組み、大正十年(一九二一)神戸購買組合と灘購買組合を創立した。

次に目を向けたのが農民運動で、農民の暮らしを脅かす病気や災害などの予測のつかない困難を「協同」の力で救うことを考えた。幾度かの挫折や中断を経て、昭和二十二年(一九四七)に農協法が制定、昭和二十三年から農協による共済事業が始まり、現在のJA共済の基礎が出来上がった。

先生は三百冊を超える書籍を世に出し、その印税を福祉・教育医療・生産・労働・協同組合・平和・人権と社会活動に活用した。そして、私たちの暮らしを支える根幹を築くことにその生涯をささげた人である。

上津具の信号交差点に「一粒の麦」の石碑が立っている。そこには大きな字で細野芳江記念碑と刻まれ、そのすぐ下に小さく一粒の麦の一文が記されている。この石碑について知り合いのMさんに話を聞いてみると、親切丁寧に教えてくださった。

「あれは賀川豊彦の書いた小説『一粒の麦』を読むといいよ」と言われ、細野さんが小説の中でヒロインであること、その小説を読んだ豊橋市在住の(故)笠原武雄さんが、細野芳江さんに感動し、石碑を建てたこと、津具が小説の主な舞台であったこと、また下津具にある村井与三吉先生の石碑も関係があることを聞くことができた。

この小説は、雑誌「雄弁」(講談社)に昭和四年(一九二九)十一月号から昭和五年十二月号まで、十四回にわたって連載され、その後しばしば刊行されている。

賀川先生が豊橋に滞在したのは、明治四十年(一九〇七)、蒲郡に滞在したのは明治四十一年、旧津具村に滞在したのは、明治四十二年である。

物語の舞台となった上津具交差点の記念碑

津具村でキリスト教の教えを伝え、小学校の教師をしながら奉仕活動をしていた村井与三吉先生と会い、その生き方に触れ感銘した先生は、立体農業を提唱し、この理念を知らせるため小説「一粒の麦」を執筆したといわれる。

小説の内容は、主人公の山下嘉吉、ヒロインは細野芳江、舞台は愛知県の豊橋から始まった。

嘉吉の仕事は丸八商店で働く沖仲仕、目標も希望もなく時世に流され、むなしい時が過ぎる毎日であった。ある日、出来心で五円の集金をくすねたまま郷里の上津具に帰ってしまう。嘉吉の家は大変貧乏で鍛冶屋の手伝いをしながら一家の生活を支えていたが、下津具の村野先生の日曜学校の夜学に通っているうち、社会に奉仕することの大切さに目覚めていった。ある日、母の実家である蒲郡に法要の代理として行くことになる。

そこで、遠縁にあたる細野芳江と出会い婚約をするが、嘉吉は間もなく徴兵で津具から出てしまう。その代りに芳江が津具に来て家族の世話をすることになった。芳江は家族の面倒を見ながら、村野先生の手伝いや社会奉仕に協力していたが、過労が募って若くして命を失ってしまった。

村野先生の協力者たちは、芳江の功績をたたえ、細野芳江記念碑を建てるという物語である。

嘉吉の家は、現在の上津具信号あたり、交差点上手に栗野医院その向かいに郵便局、南側に薬局、向隣の散髪屋、その隣に酒屋、西隣に鍛冶屋が登場する。

このあたりの様子は現在の上津具と変わらないようである。

村野先生のモデル　村井与三吉先生の碑

下津具には、保育園跡地の近くに賀川豊彦先生の書による、村井与三吉先生の碑が立っている。

村井先生は、尾張藩士の村井易清の長子として安政五年十一月に生まれた。

津具に来たのは明確でないが、キリスト教の布教と地域の奉仕活動であった。

大正十四年十一月永眠、享年六十五歳であったという。

(設楽町文化財保護審議会
委員　加藤　博俊)